

# 『源氏物語』夢浮橋卷の構造

——錯綜する時間を手がかりに——

山 田 利 博

## 一．問題の所在

言うまでもなく夢浮橋卷は『源氏物語』最終卷であるが、その終わり方が落ち着かないため、古来より未完結説が存在する<sup>(1)</sup>。本稿が引用テキストとする大島本（角川学芸出版のDVD-ROM版により、私に校訂し、検索の便に資するため、岩波の新古典文学大系（以下、新大系と略称する）の該当箇所の頁数を付する）を始めとして、『源氏物語大成』によれば、青表紙系の有力諸本の巻末には、物語の閉じ目を示す「とぞ本にはべめる」<sup>(5)</sup>（四〇八頁）という言葉、尾州家を始めとする河内本系および別本には、恐らく同じ意味と解して良い「とぞ」という語が存在するので、これが信じられれば、「ここで終結」と決定する。しかし、比較的新しい『源氏物語』の注釈書・新編日本古典文学全集は、旧全集から踏襲した可能性もあるけれども、「本を書写した人が、「底本にこうあります」と写本の末尾に加えたもので、鎌倉期以後のものといわれる」と明記する<sup>(6)</sup>（一九九八年刊）三九五頁頭注一九）。一方、ほとんど同じ時

期に刊行された新大系の解説（注（1）に同じ）および今のところ最も新しい注釈書と思われる、至文堂の『源氏物語の鑑賞と基礎知識』No.43夢浮橋卷では、「（一）本を書写した人物が「底本にこうある」と写本末尾に添えたもので、鎌倉期以降の常套句。（二）形は後人の注記だが、実はそれを装った本来の本文。従来は（一）が一般であったが、現在では（二）の立場が主流のようである」（八九頁。補助論文として九二―四頁にも）という意の解説がある。個人的には後者に荷担したいところだが、結局これは決め手にならないということである。

さらに、玉上が中絶の理由の一つとしてあげた、紫式部が早世したからというのは、その後、萩谷朴、今井源衛等により、寛仁三（一〇一九）年、五〇歳近くまでの生存が有力視され、昔思われていたほど当時としては短命ではないと考えられることから、霧消したかと思っていたが、先ほどの『源氏物語の鑑賞と基礎知識』の二頁には、「未完であるとするれば、その理由はなにか、作者の死か、その剃髪か、あるいはその他の因由があるのか、想像

は想像を生んでとどまるところを知りません」とあり、そういうこともないようである。考えてみれば、何歳まで生きたからこれで充分ということもないのであり、所詮これも決め手にならない。そうすると、残るは物語の構造そのものに決め手を求めるしかないと思うのであるが、これについてももちろん先学の研究がないわけではない。先ほどの新大系の解説、或いは井野葉子による『物語の完結・未完』（神田龍身・西沢正史編『中世王朝物語・御伽草子事典 勉誠出版 二〇〇二年』）に見られる「開かれた終わり」或いは「開けたままの終結」という仮説も非常に魅力的なものであり、賛同してしまっても良いのだが、前者がその証明に、栗本薫の『グイン・サーガ』や高橋陽一のマンガ『キャプテン翼』を導入したことに象徴されるように、いささか『源氏物語』そのものから離れてしまっている感もなくはない。

また、徹頭徹尾『源氏物語』夢浮橋巻の分析に終始しているように見える吉井美弥子の「夢浮橋巻の沈黙」（『読む源氏物語 読まれる源氏物語』第二十章 森話社 二〇〇八年）中にある、「表現によつて紡ぎ出されていく物語が、その主題的意義を担う登場人物浮舟に、その存在を支えるものとして、もはや表現ではなく「沈黙」を選び取らせているということは、この物語もまた「沈黙」へといたり着こうとしていることを象徴しているのではないだろうか」（三三四頁）という文言も、今風の言葉で言う、「鳥肌が立つほど」見事な言い回しではあると思うが、次節で自らも慎重に、「物語がなぜ夢浮橋巻をもつて終わるのか、というきわめて大きな問題については、さまざまな要因がそこに認められ、以上の検

討と考察からのみでは、もとより即断は差し控えたい」と言っている（三三五頁）ように、冷静に考えれば、この二つの「沈黙」がシンクロしている保証はないわけである。

もとより文学の証明に絶対がないことは、常に教えた子たちにも言い続けているが、その『源氏物語』の講義で毎年、夢浮橋巻に言及する時、これまた言い続けている見解がある。自分では、途中まではごく当たり前のことを言っているつもりで、ひよつとするとだから誰も言わないのかもしれないが、ざつと見渡したところ、類似の論が管見に入らなかつたので、吉井の言うところの「さまざまな要因」の一つぐらいにはなるかと思つて敢えて提示し、諸賢の御批正をお願いする次第である。端的に言えばそれが副題に謳つた「夢浮橋巻の」錯綜する時間（構造）」ということである。順に説明していこう。

## 二．凝縮した時間

最初に指摘することは、既に『源氏物語の鑑賞と基礎知識』No. 43の一七頁にも言及されている、「夢浮橋」巻は薫が比叡山に登り、翌日横川を訪れ僧都と話し、日が暮れてから出立して京の邸にもどり、翌日小君を小野の庵へ使わすというわずか三日間の出来事を語る巻です」である。一巻で三日という短さは、『源氏物語』では意外に珍しく、短い巻でも、例えば空蟬巻は、「女（＝空蟬）もなみくならずかたはらいたしと思ふに、御消息も絶えてなし」（①八四頁・傍点等は稿者、以下同じ）、「小君ハ」おさなき心地に、いかならんおりと待ちわたるに」（①八五頁）等に数日の経過が感

じられるし、関屋巻では、巻末の常陸守の死から、河内守が継母・空蟬に言い寄る辺り(②一六二・二三頁)、篝火巻でも、巻頭「秋になりぬ」(③二九頁)という表現から、かなりの時間経過が読み取れるのである。つまり、このような短い時間を一卷に当てているのは、この夢浮橋巻だけと言っても過言ではなく、それが本節のタイトル「凝縮した時間」の意味である。しかし、別の意味で時間が凝縮しているのは、もう一卷ある。首巻・桐壺巻である。

周知のごとく桐壺巻は、光源氏の誕生以前から一二歳元服までを扱っているから、およそ一三年の時間を含んでいる計算になる。あとの注で取り上げる玉鬘巻(二八頁)、成立に問題を孕む竹河巻(約一〇年)という、特殊事情のある巻を除けば、『源氏物語』最長で巻中に四年の空白期間を含む若菜上巻ですら七年であるから、これは異例の長さと言える。やや脱線めくのであるが、あとで効いてくるので述べておけば、人間以外を主人公としているので一見例外のように見える『竹取物語』すら実は例外ではなく、平安物語劈頭の時間経過は皆一様に速いのである。

これは、平安物語が和歌を含み、肉体的恋愛を主とするものである以上当然のことで、毎年この辺りで学生の失笑を買うのであるが、赤ん坊は和歌は詠まないし、恋愛もしないからである。ゆえに平安物語では、主人公の子ども時代は猛スピードで駆け抜けるか、『伊勢物語』や『狭衣物語』『夜の寝覚』等のように、いつそのこと主人公が大人になる直前くらいから始めるしか方法がない<sup>(7)</sup>。そういう意味では、人間ではないから、如何なる年の取らせ方も可能である主人公を設定した『竹取物語』は、改めて画期的

であつたと思うのだが、主人公を「人間」と設定するなら、同様の年の取らせ方は不可能となり、別の形が要請されることになる。その一つの結果が、「すくすくと引き伸ぶるもののやうに大きくなる」、つまり、どこか異類の異常成長を思わせる『うつほ物語』の仲忠の成長の姿(小学館・新編日本古典文学全集①七一頁。以下、『源氏物語』以外の古典引用は全て新編日本古典文学全集本による)であり、光源氏の成長も、これと通ずるところがあろう<sup>(8)</sup>。

つまり、平安物語の開始が時間の流れの異常な速さにあるとすれば、終末はと考えれば、川の流れが最初急でありながら、河口付近に至るとそれが緩やかになるように、時間の流れの緩やかさなのではないかという想像は極めて容易に湧いてくる<sup>(9)</sup>。だとすれば、一卷で三日しか時間が進まない夢浮橋巻は、その条件に合致してくることは確かなのである。換言すれば、物語の時間の進行速度という観点から見ると、夢浮橋巻は、終末の様相を備えているということである。

### 三. 二通の横川僧都の手紙

夢浮橋巻の時間の流れでもう一つ気になる点が、二通の横川僧都の手紙である。例えば『源氏物語』の鑑賞と基礎知識 No.43では、それを「僧都の文(その二)」、「僧都の文(その三)」と表現しているのだが、書かれた順で言うとは、それは逆である。全ての注釈書が言及しているように、僧都としては(その二)の方が後で着き、浮舟たちに読まれるという前提で書いているのだが、世間体を気にして、使者である小君を翌日改めて立てるという形を採らざる

を得なかつたという、如何にも薫的な行動が原因で、實際は（その二）の方が先に着いてしまふのである。その結果何が起つたか。問題の（その二）の手紙を引用しよう。

よべ、大將殿の御つかひにて小君やまうでたまへりし。事の心うけ給はりしに、あぢきなく、かへりて臆し侍てなむと、姫君にきこえ給へ。みづから聞こえさすべきことも多かれど、けふあす過ぐしてさぶらふべし。 （⑤四〇〇頁）

だが、前述した理由から小君はまだ来ていないので、遂に薫に自分の生存が知られたことのみは、浮舟は察したのであるが、その他の事情は、周りの者たちも含めて分からなかつたに違いない。そうこうしているうちに、「山より、僧都の御せうそこにて、まいりたる人なむある」（⑤四〇一頁）と小君がやってくるから、続く物語本文に、「あやしけれど、これこそさはたしかなる御せうそこならめ」（⑤四〇一頁）とある通り、そこにいた人々は皆、この手紙によって全ては明らかに成ると期待したのである。しかし、「僧都の文（その二）」は、残念ながらそのようなものではなかつた。次に同じく全文を引用する。

けさ、こゝに大將殿のものし給て、御ありさま尋ねとひ給ふに、はじめよりありしやうくはしく聞こえ侍りぬ。御心ざしふかゝりける御中を背き給ひて、あやしき山がつの中に出家し給へること、かへりては仏の責め添ふべきこととなるをなむ、うけたまはりおどろき侍る。いかゞはせむ。もとの御ちぎり誤ち給はで、愛執の罪を晴るかしきこえ給て、一日の出家の功德ははかりなきものなれば、なを頼ませ給へとなむ。

ことごとくにはみづからさぶらひて申侍らん。かつくこの小君きこえ給てん。 （⑤四〇二頁）

冒頭に「けさ」とはあるが、僧都はその日のうちに薫が小君を浮舟のもとに送ると想定していたので、實際は前日の朝であることは、これも全ての注釈書が解説している。その日、薫が横川を訪ねてきて、今までの経緯を説明したので、僧都自身も、取り返しのない失敗をしたのではないかと慌てふためいていること。そして、今でも還俗勸奨か非勸奨かで解釈の割れる、「もとの御ちぎり誤ち給はで、愛執の罪を晴るかしきこえ給て、一日の出家の功德ははかりなきものなれば、なを頼ませ給へ」という、謎のような言葉<sup>(10)</sup>を挟んで、細かいことはいづれ自分が行つて説明するが、それまではこの小君が語るであろうとしか書かれていないこの手紙では、疑問が解けることは全くなく、周囲の者はますます混乱を極めるのである。けれど、これは仕方のないことである。何故ならこの「僧都の文（その二）」は、何度も述べたように、（その一）より前に着くはずだったので、（その二）を補足するつもりなど僧都には始めから無く、どちらかと言えば、「補足」は（その二）の方だったはずだからである。

ここまで言えば、僧都の想定通り、もしこの二通の手紙が（その二）、（その二）の順で届いていたらどうだったか想像してみようという提案は、そう無理なく納得されるのではないかと思う。確かに、今見る状況と違って、何の前触れもなく小君が訪れるその場合は、最初のうちこそ今より混乱が大きかつたかもしれないが、もし、浮舟が現状の通り、完璧に小君を拒否して帰した後

（その一）が届いたとすれば、「何だか分からないが、とにかく僧都の到着を待つてみよう。そうすれば、全ての謎は解けるだろう。何しろ二度も自分が行って説明すると書いてあったのだから」と、今より混乱少なく事態は収拾したのではなかろうか。もしこの想定が許されるなら、事態を一層混乱させているのは、薫の性格からして如何にもという理由を作り上げ、二通の手紙を、本来と逆の順で着かせた作者の作為ということになる。つまり、ここにはある種の「時間の逆転」があるということなのである。

しかも僧都は物語が終わるまでやってこない。何故なら最初に確認したように、この夢浮橋巻は、わずか三日しか描かない巻だからである。

横川で薫が僧都に浮舟のもとへの案内を依頼した時、僧都は「まかりおりむこと今日明日はさはり侍。月たちての程に御せうそこを申させ侍らん」（⑤三九七頁）と断っていた。毎月八日は薬師仏の縁日で、薫は以前から供養していたから、それを口実に薬師如来を本尊とする比叡山の根本中堂に先ず参つたと前巻・手習巻巻末にあり（⑤三八六―七頁）、その翌日に横川に行ったと夢浮橋巻に書かれている（⑤三九二頁）から、薫が横川を訪ねたのは九日と、これまたどの注も推定している。ならば、「月が変わってから」というのは明らかに長すぎ、『源氏物語の鑑賞と基礎知識』No.43の四五頁の「鑑賞欄」のように、僧都が時間稼ぎをしていると解すべきであろう。しかし、語るに落ちるというか、この言葉にもポロツと出ているし、先ほどの「僧都の文（その二）」にもあるから、「今日明日は用事がある」というのは、多分本当の

ことなのであろう。それにしても一か月ではなく僅か三日程度の時間である。物語に書くことと思つて書けないことはなかったであろう。だとすれば、夢浮橋巻末に、どうしようもなく浮舟とすれ違ふ薫の心中が描かれるのと同様、横川僧都が来る前に物語を終わらせてしまふというのは、非常な作為を感じないだろうか。

これも最初に、夢浮橋巻の終わりを「開かれた終わり」と捉える捉え方があることを確認したが、だとすると夢浮橋巻は、偶然あるいは結果的に「開かれ」ているわけではなく、明らかに意図的に開かれているのだということになる。

#### 四・理想的な「終わり」

明らかに意図的に「開かれた終わり」と言うと、稿者の脳裏にすぐ浮かぶのは、『浜松中納言物語』の終わりと、それに対する神田龍身の評である。手順としては、『浜松中納言物語』の終わりを引用すべきかとも思うのだが、コンパクトに引用することはなかなか困難であるので、神田の評を見ればそれは分かると思ひ、こちらのみを引用する。

人間とは死ねばおしまいなのであって、何度転生を繰り返したところで、結局のところ過去の至福なる時間は蘇らない、という苦い認識がここにはあることになる。あるいはまた、あらゆる物質性を否定し、永遠に変わらぬ何かを転生を介して幻視したとしても、結局それはむなしいうことでもある。またそうである以上、後の再来を待ち続けるといふ熱き時間のうちにしか、物語のハッピーエンドはあり得ないとい

うものではないのか。<sup>①</sup>

『浜松中納言物語』は別の作品であるので、この評に対する直接的言及はここではおろが、夢浮橋巻の終わりが、浮舟にとって「ハッピー」であるとは到底思えないにせよ、少なくとも『源氏物語』の読者にとっては、これ以上良い終わり方があり得ようか。例えば物語が横川僧都の来訪まで描かれていたとしたら、還俗を勧奨するにせよ、しないにせよ、師僧のつとめとして、何らかの回答を彼は浮舟に与えたであろう。だがその結果は、今でも還俗勧奨、非勧奨の論争が絶えないように、全ての読者が納得する形とはならないであろう。

また、浮舟が同意するか否かはこれまた不明だが、当時の常識に鑑みれば、空蟬の尼のような形であっても、浮舟が薫に庇護される公算は高い。しかし、もしもそう描かれていたとしたら、これまた「つまらない」ということになりはしないだろうか。それゆえ果敢に夢浮橋巻の続きを描く『山路の露』は、薫と浮舟、或いはその母を会わせはするものの、事態はほとんど進展しないのであろう。

つまり、何も描かず全てを読者の想像に委ねる夢浮橋巻の終わりには、逆にそうであるがゆえに全ての読者が受け入れ可能な形となつていたのであり、また、一部の読者を刺激して、その続編を作らせる、つまり物語に参加させ続けるという手法により、どれだけ時代が下ろうとも、あらゆる読者の興味を惹きつけ続けるという、言わば理想の終わりとなつていくわけである。もつとも、このこと自体は既に先学により指摘されている。もしも本稿がそ

れに何らかの付け加えが出来たとすれば、それは決して偶然や結果ではなく、意図によるものだということなのである。

## 五. まとめに代えて——物語の終わりに対する疑義

以上、夢浮橋巻の終わりは、あれで完結していると見なして良いのだということについて粗々述べてきた。講義で取り上げているのは、難易度の関係から大体こまでなのだが、せっかく専門の方が読者であるので、いささか風呂敷を広げすぎるかという感もあるのだが、もう少し根源的な疑義を提示して本稿を終わりたい。それは、物語の終わりとは、本当に何らかの形で「静止」を伴うものなのかというものである。そんなことを言うと、第二節で述べたことと矛盾していると思う向きもあるかも知れないが、当人はあまりそう思っていない。言い訳に聞かえるかもしれないが、「時の流れが遅くなる」とは確かに言っただけども、「静止」するとまでは言っていないし、川は河口で海に流れ込んでも、今度海として続いていくからである。

既に例として取り上げた『浜松中納言物語』はもちろん、他の物語でも、『竹取物語』では富士の煙は今も立ち上っている。『うつほ物語』でも犬宮の名演奏の興奮さめやらぬうちに幕が下りるし、今西の解説(一)中でも、原田芳起による角川文庫本の脚注を援用して言及しているように、少なくとも現存のテキストには楼の上・下巻の最後に、「次の巻に、女大饗の有様、大法会のこと」はあめりき。季英の弁の、娘に琴教へたまふことなどの、これ一つにては多かれれば、中より分けたるなめり、と本にこそ待るめ



れ」(③六二一頁)とある。説明の都合上、少し飛ばして後期物語を先に語れば、『夜の寢覚』は末尾が失われているので同列には扱えないとはいえ、現存末尾では寢覚の上の寢覚は続いているし、同様に『狭衣物語』でも帝になった狭衣の嘆きは尽きない。主人公の死で閉じる『伊勢物語』は、歌物語だからそれこそ別格で、決着がつきそうだった『落窪物語』でさえ、最後の一文は「『典侍は二百まで生ける』とかや」(三四三頁)とあり、まとまりそうだった時間が、いきなりはじけて終わる。同様に『とりかへばや』も、新編日本古典文学全集で言うところの第五七節「大団円。東宮即位。二宮立坊。姫君入内」で終わってはいまだ分るが、実際は次の第五八節「内大臣、宇治の女大將を思い、嘆き絶えず」で終わるのである。つまり、およそ考えつく限りの物語の終わりで、おとなしくまとまっているものなど、どれ一つとしてなく、基本は人生の一断面を切り取った短編物語の集積で、「終わり」を論じるには適当でないと判断して取り扱わなかった『堤中納言物語』中の「虫めづる姫君」の最後、「二の巻にあるべし」(四二〇頁)は、むしろ先ほどの『うつは物語』の最後と通うところすらある。すなわち、平安物語において長編物語と短編物語の最後は、本当に差違があるのだろうかという疑いすら湧いてしまうわけである。

そんなことを言うと、最初に取り上げた今西の、「物語はいっ終わっても良い」という意見に似てくるのだが、そこまで話が及んだ時ふと気にかかってくるのは、今西が簡潔にまとめてくれた『源氏物語』の完結・未完結論争の発端が、どうやら藤岡作太郎

らしいという事実なのである。管見の及んだ限りでは、この見解は正しく、いわゆる古注釈には、巻にも歌の詞にも「夢」の語はあれども「夢浮橋」という語のない、この巻の巻名の由来についての議論はあっても、完結か未完結かの議論は見当たらない。このことは、語釈を主とする古注釈の段階では、その議論をするまでのレベルに達していなかったという見方のもちろんできるが、ひよっとすると、「物語の終わりは「静止」である」というのは、陣野英則がよく指摘しているような、近代の者たちが持った変な思い込みのようなもので、昔の人々にとっては、この終わりが終わりではないなどという考えは、浮かびもしなかったのではないかとこの可能性もある。

夢浮橋巻の終わりは、そもそも物語の終わりというのとはどのようなものであるかという、根源的な問題にまで遡って考え直してみることを迫るものだと思うのである。

注(1) その辺りの詳しい機微は、玉上琢彌「源語成立攷——擲筆と下筆とについての一仮説——」の、特に「一 夢浮橋のとだえ」の件(『源氏物語研究』 角川書店 一九六六年)、今西祐一郎による、岩波の新古典文学大系『源氏物語』五(一九九七年)解説「『源氏物語』の行方」等を参照のこと。

(2) 本稿の引用テキストとして大島本を選ぶ理由は、拙稿「風景をつむぐことば——風景の中に人を見、人の中に風景を見ること——」(助川幸逸郎・土方洋一・松岡智之・立石和弘編『新時代への源氏学』第5巻 竹林舎 二〇一五年)の注(2)でも述べたが、近年の本文研究によれば、校訂により「源氏物語」(青表紙本)の本文に近くくことはほぼ不可能で、できることは、一つの写本に忠実な読みを

することしかないと判断したためである。かと言って、大島本の優位性も今揺らいではいるが、それに代わる本も今のところ決めがたいので、当面の処置としてこのようにしておく。

- (3) 正確には、青表紙本系でも、『大成』夢浮橋巻の底本になった池田本には「とぞ」（以下は見せ消ち・稿者注）とあり、横山本・榎原本・平瀬本は「とぞ本にはざるめる」（傍点稿者）、勝安房旧蔵本・肖柏本は大島本と同じ。河内本系では七毫源氏が「とぞ本に侍る」、別本では、高松宮家本が大島本と同じ。保坂本は「ならひとぞ」、国冬本・桃園文庫本が「とぞ本に侍」とあるとのことである。「とぞ」と「とぞ本に」は若干ニュアンスが違うのかもしれないが、たとえ「とぞ」の下に略されているのが「伝へたる」の類だとしても、物語の終了を意味する言葉には違いないという判断で、本稿では特に区別していない。その「とぞ」ですら、後世の付加である可能性があることは、『源氏物語』の鑑賞と基礎知識 No.43の野村精一による補助論文「源氏物語の世界——物語の終局について——」（傍点原文のまま）でも説かれている（九三頁）。

- (4) 旧全集⑥三八一頁頭注一七にも全く同文が認められる。

- (5) 萩谷朴「紫式部日記全注釈」下巻（角川書店 一九七三年）解説五〇七頁、今井源衛「紫式部」新装版（吉川弘文館 一九八五年）三〇五頁。

- (6) 管見の及んだ範囲では、『源氏物語』は長すぎて、その全てを取り扱うことは講義中では不可能なので、おおよそ①一卷だけを集中的に講ずる、②跳ばしながらも全体を講ずる、の二つの方法に分かれるようである。稿者が所属するのは教育学部で、専門性より教材を教えるための概論的知識が必要と判断し、後者の方法を採用している。ゆえに毎年言及することになる。

- (7) 『落窪物語』等の、いわゆる継子いじめ譚も形は同じだから、一見ここに入るようであるが、そもそも継子譚は、実母が亡くなって、継母が出来ないと始まらないので、そういう理由もあると思われる。

- (8) そういう意味では、『源氏物語』のヒロインの一人とも言える玉

鬘が登場する玉鬘巻も同様と言える。稿者は以前、小林茂美の「玉鬘——物語展開の原動質から——」（『源氏物語講座』第四巻 有精堂 一九七一年）を援用して「小さ子の異常成長譚」を導入していると解したことがあり（拙著『源氏物語解析』第一部第二章第四節玉鬘の造型 明治書院 二〇一〇年）、今、撤回するつもりはないのだが、こういう視点も加えても良いのではないかと思っっている。そのように考えれば、クライマックスとは言え、「竹取物語」の八月十五夜の描写は、嫌に執拗であるように思うし、いちいち例を挙げることは割愛するが、ほとんどの物語のラストは、時間の流れが緩やかである気がしないだろうか。

- (10) これも諸注が言及しているように、この手紙は薫に読まれるであろうことを、僧都が想定しているためであろう。つまり、どちらでも取れるように書くことで、僧都は自分の真意を明かさなかったのだと思う。その真意が語られるのが、二つの手紙にあった、僧都が小野を訪れる時なのであろう。このやり方は、秘伝などの伝授方法を連想させる。

- (11) 神田龍身「物語文学、その解体——『源氏物語』「宇治十帖」以降——」（有精堂 一九九二年）第一部 V 章 転生と形代——『浜松中納言』『松浦宮』—— 一八二頁。

- (12) もちろん、ここで例示している箇所は、「後世の書き加え」という説があるところが多い。しかし、そもそも本稿の発端がそうであったように、それが正しいという保証もないわけだし、そういう説が出てくる理由の一端には、やはり「物語の終わりは静止しているべきだ」との思い込みがあるような気もする。本稿は一度その思い込みを捨てて必要があるのではないかとすることを提起するものであるから、敢えてその説は採らないことにする。

また、前述の井野葉子「物語の完結・未完」（『中世王朝物語・御伽草子事典』）によれば、「中世王朝物語で「閉ざされた終結」として完結している物語は多い」とある（八二頁）から、この点は考慮しなければならぬだろうが、そもそも平安朝の物語と中世王朝物



語を同列に論じて良いのかという問題もある。現存本は鎌倉期の改作かとされる『住吉物語』を取り扱わなかったのもこの理由によるもので、そのためかその最後は、

あはれなること、さてしもむなしくならんことのいたはしさに、末の世まで、心あらん人は思ひ知るべしとて、かたのごとく記しはべり。これを見ん人々、ゆめゆめ人のため後ろ暗きことを、振る舞ひ思ふべからず。

何とただ年月ものを思ひけんかかるめでたき世にもあひつ

(一三六頁)

と、他に例を見ない説教調の言葉で結ばれている。井野の言う通り、『中世王朝物語』で「閉ざされた終結」として完結している物語は「本当に「多い」と言えるのかという問題や、平安朝物語と中世王朝物語を同列に論じられるのかといった問題については、再度中世王朝物語全体を見直した上で論じたい。

また、これに通じる問題として、時間をかけて成立したらしい平安前期の物語と、一回的に成立したと思われる後期の物語を同列に論じて良いのかという問題もあるかも知れないが、深町健一郎の『伊勢物語』に関する諸論考が示唆するように、最後に手を入れたものが作品を全体的に統括する(万葉集を見よ)ので、結局それはどの差違はないというのが今の考えだが、これについても更に考察を深めたい。

## 新刊紹介

佐藤信雅著

### 『源氏物語 草子地の考察』

——「桐壺」～「若紫」——

その起源は古いながらも、いまだに新たな知見が出されている「草子地」という術

(13)

但し、今西も引用し、正確を期するため本稿でも次に掲げる藤岡は、両論併記という形で、特に未完結を推すものではないらしい。人々の運命はいまだ定まらず、かくして源氏物語は完結せるものとすべきか。余或いは謂えらく、源氏薨じて説話は大段落を告げたるにも拘わらず、著者はなお倦まずして続編を綴れり、この勇猛心を以て、如何ぞ更に段落なきところを筆を止むべきや。こはなおその後を書き続くべき意ありしならんが、事故ありて果さず、または病歿して成らざりしものならんが。翻えりて思うに、必ずしも然らず。夢浮橋の名は既に転蓬渾流の世態を示せり、運のさだめなき世のさだめ、悲しきことも悲しきことのみにあらず、めでたきこともめでたきに終らず、宇津保、落窪の如き結末は、人生を写さんとする著者の目には余りに稚し。さらばなお委曲に波瀾蕩揺の様を写し往かんには、更に同じことを繰り返さざるべからず。かくしてさだめなきにさだめ、将来の運命如何を想うて読者をして伎癢の感に堪えざらむるところ、即ち紫式部が苦心慘憺の跡を見るべきにあらずや。『国文学全史』2 平安朝篇 東洋文庫 一九八四年 一〇六頁)

(14) 例えば、陣野英則『源氏物語論 女房・書かれた言葉・引用』(勉誠出版 二〇一六年) IV 「宇治十帖」の言葉 第二章「総角」巻の困惑し合う人々——「いとほし」の解釈をめぐって——等。

語であるが、本書はそうした議論の中に新たな視座を提供するものである。著者は源氏物語各帖の展開を「序・破・急・余韻」の横糸と、「話」の縦糸からなる有機的な構造として読み直す独自の観点から、さらに詳細な個別の分類によって、一般に草子地と呼ばれるそれらの文章が、話題を重層

的に展開させる源氏物語の構成に大きく寄与していることを指摘してゆく。本書の徹底的な分析の後には、さながら物語の解剖標本にも似た、新しい源氏の姿を見ることができらるだろう。

(二〇一六年五月 新典社 A5判 三四二頁 本体一〇二〇〇円) [長尾 崇]